

平成23年7月27日（水曜日）

陸前高田市災害レポート④

福岡市立こども病院・感染症センター 高橋 宗康

（派遣先：岩手県立高田病院）

7月25日から新しい仮設診療所へ移転しました。これまでの震災発生から4か月間、既存の施設を間借りし、狭く寒暖の差が大きい中、やり繰りして診療していました。本日より、診療所という形態（入院ベッドのない）で、外来・救急中心の医療ですが、施設環境は快適です。津波の到達可能性が低い地点に、体育館1面ほどの広さの1階建ての家屋が建設されました。エアコンが効きますし、事務、薬局、診察室が分離されています。震災前であれば、ごく当たり前の環境ですが、高田病院にとってはやっと手に入れた宝物です。新鮮さと、もとの診療に戻れる高揚感で、皆の意気が上がっているのを感じられます。数か月後には、診療所の裏に仮設病棟も建築予定で、高齢者の褥瘡や感染症などへも対応できるでしょう。



新仮設診療所
待合室
初日は200名来院



朝、夕の全体ミーティング
左端が院長

仮設診療所の名の通り、今回の診療所は2年間限定の仮施設であり、2年後は鉄筋コンクリートの有床病院を目指しています。

陸前高田市では、高血圧症などのプライマリーケアを担っていた開業医が津波で亡くなったり、幸いに助かった開業医も仮設のプレハブで規模を縮小して診療をしています。つまり陸前高田市の医療基盤は骨抜きにされ、崩壊の一手手前まで追い詰められています。高田病院は、そういった開業医で診療されていた患者の受け皿をも担わざるを得ませんので、必然的に患者絶対数が増加します。加えて、従来通り、地域中核病院として、高度な治療・検査や入院等を行わなければならないとなると、病院のキャパシティを超え、手が回らない事態に陥るでしょう。また、津波以後、職員の退職もあり、医師数が減っています。一人の医師が担う仕事が増加し、疲弊し、燃え尽き症候群となる可能性があります。それならば、より広域の医療区域で補うのはどうかですが、車で30分の隣町の大船渡病院自体も被災し、さらに震災後、陸前高田地域や、その北の釜石市地域の救急患者が搬送されるため、手一杯の状態です。

かくして、根本的に足りていないことを内包していた岩手県南部の医療は、津波のダメージにより「被災」、「医療過疎」の二重の重荷を背負うことになりました。

仮設住宅についてお伝えします。被災直後、市民は、中学校の体育館など避難所で生活していましたが、ようやく仮設住宅が建設され、くじで当たった住民が少しずつ転居しています。高田病院の職員は、陸前高田市から内陸へ20kmの住田町にある、旧県立住田病院の2階を借用し、医師、看護師、薬剤師と共同生活していたとのこと。その後、被災職員や応援医師のため、岩手県から旧県立住田病院の周囲に仮設住宅が建設されました。私も応援医師用の仮設住宅の一つを借用しています。研修医が隣で、院長はその隣に住んでいます。通勤は何人か車を乗りあわせて陸前高田市まで通っています。(多くの人が津波で車を失ったため)。



仮設住宅は、生活するには十分な環境です。難点は、アリの発生、壁が薄く冬の寒さ、雪への耐性といった程度です。



応援に来てくださった先生へ
感謝の気持ちとしての夕食会

- ・東北大 小川先生
- ・大阪医大 星山先生

住田町は、津波による被害はなく、平素の生活状態に戻っています。近くにはホームセンターやスーパーもあるので問題ありません。平穏な住田町から、毎朝、数十キロ車でいくと被災した市街地があります。別の世界があることに戸惑い、今でも信じられません。

私の任務も今週で終了します。多大なご配慮を頂いた、福岡こども病院の皆さんに心から感謝申し上げます。被災地の方も大変感謝しておられ、更に滞在することを希望されていました。私は、福岡の思いが、今後の復興の一助になればと切に願っています。

